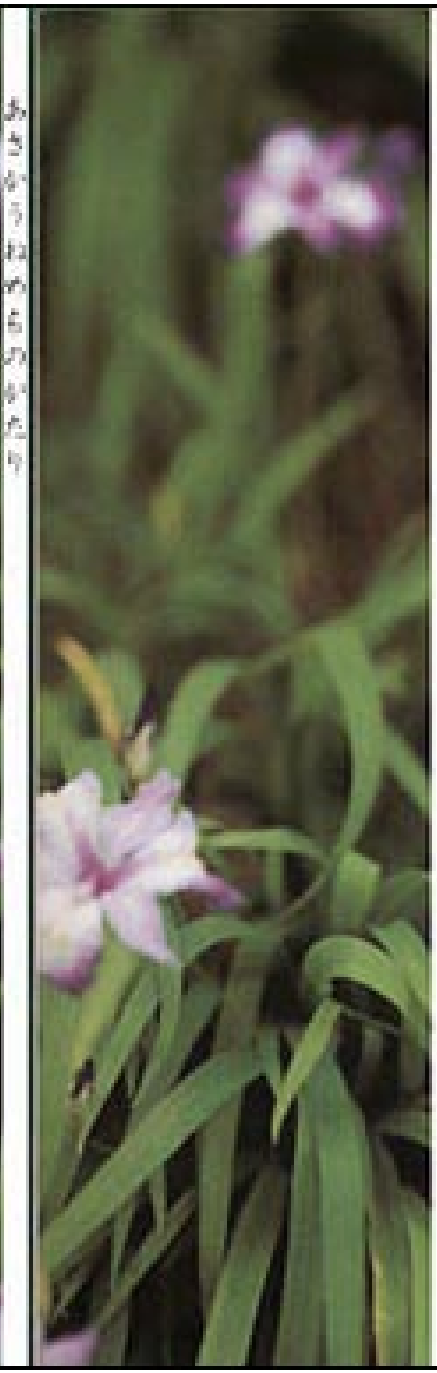




子どもたちに伝えてほしい  
あさかろうねめものがたり



あさかろうねめものがたり

山形の「市の花」花かつみ

あさかうねめものがたり

左近司 マサ江・文  
橋本 貢・絵

郡山市では、

毎年、八月二日から三日間  
うねめ祭りまつりにぎわいます。

この祭りの起おこりとなつた物語ものがたりを、  
お話ししましょう。

遠い昔、奈良の都が栄え、にぎわっていたころのお話です。

陸奥の国、安積の郷は、遠くに山々がつらなり、広い荒れ野には、葦が  
おいしげっていました。

村人たちは、日の出とともに家族そろって田畑へ出かけ、夕日を背に、  
家路をいそぐ暮らしをしていました。

村を治めていたのは、安積臣虎麻呂という人で、館がたくさん建ちなら  
ぶ、広い広いお屋敷にすんでいました。

村人たちは、虎丸長者と呼んでいました。

この長者には、ふたりの娘がありました。姉を浅香姫、妹を春姫といい、  
ふたりとも、いなかにはまれな美しい娘でした。美しいばかりでなく、



かしこく、清らかな心をもっていました。

姉の浅香姫は、帝におつかえするうねめとして、奈良の都ですごしていましたが、今はそのつとめをおえて、安積の郷にもどってきていました。

妹の春姫は、太郎と夫婦になる約束をしていました。太郎は、安積国造神社の神主のむすこで、笛の名人でした。

さて、奈良の都に葛城王という位の高い役人がすんでいました。

ある日、王は、帝から陸奥の国の人びとの働きぶり、作物のできぐあいをしらべる役目をおおせつかりました。家来に旅のしたくをととのえさせて、寒さのきびしい二月のはじめに、お供をしたがえて、安積の郷にむかいました。



いくつもいくつもの山をこえ、いくつもいくつもの川をわたり、宿場しゆくばから宿場へと旅たびをつづけました。

安積あさかの郷さとが見えてきたのは、はやぎきの桜さくらが咲さきはじめた、三月の終おわりのころで、奈良ならの都みやこをあとにして、六十日あまりもたっていました。

あすは安積あさかの郷さとにはいる昼どきのこと、王おおきみの一行いっこうが休やすんでいると、急きゆうにつよい風が吹ふいてきて、一枚の紙かみが、ひらひらと葛城王かつらぎのおおきみの手もとにまいこみました。

見ると、美しい娘むすめの絵姿えすがたでした。あまりの美しさに、王おおきみは、その絵姿えすがたを、ふとここにたいせつにしまいました。



さて、つぎの日、長者ちやうじやと村人むらびとたちがでむかえるなかを、王おおきみの一行いっこうは、安積あさかの郷さとにはいりました。

葛城王かつらぎのおおきみは、さっそく長者ちやうじやを館やかたによび、安積あさかの郷さとのようすをもうしのべよといいました。長者ちやうじやはすすみでて

「ここ二年というもの、天候てんこうがわるくて、米こめや野菜やさいが不作ふさくでこまっています。

村人むらびとたちは、とても貧ますしい暮らしくをしています。どうか、年貢米ねんぐまいを納めおさることをお許ゆるしてください」と、お願いねがいしました。

王おおきみは

「いや、許ゆるせぬ」と、おお声こゑでいいました。

長者ちやうじやは身みをちじめて、地面じめんにひれふして、ふたたびお願いねがいしました。

「年貢米を納めると、村人たちのたべる米がなくなってしまいました。どうか、お許しを」

王は、たいそうおこりました。

長者は、きげんをなおしてもらおうと、村人たちに、踊りをおどらせたり、めずらしい料理をつぎつぎと運ばせたりしました。

けれども、王の怒りはおさまりません。長者は、こまりはてしてしまいました。

そのときです。長者の姉娘の浅香姫が、左手に高い杯をもち、右手に水のはいった器をもって、王の前にすすみでて、歌をよみました。

安積山 影さえ見ゆる山の井の

浅き心をわが思わなくに

「葛城王は、どうして、ごきげんがわるいのでしょうか。安積山のふもとに、山の井の清水という池があります。安積山がその池にうつつて、それはそれは美しいのです。水の浅い池のように思われますが、とても深い池です。その池とおなじように、わたしたちは、王を深く深くおしいしています。どうか、この気持ちをおかしてください」と、いう歌でした。

この歌をきいて、葛城王は、たいそう心をうごかされました。「美しく、かしこい娘よ。その杯をこちらにもってまいれ。酒をのんでつかわす」

こうして、にぎやかな宴うたげとなりました。

いい気持ちになった王おおきみは、ふところから絵姿えすがたをとりだして

「この地には、美しい娘むすめがおおいとみえる。この絵姿えすがたは、きのう、わたしの手もとにまいこんだものだが、あまり美しいので、こうしてふところに入れてまいった。この娘むすめをさがして、ここにつれてまいれ」と、いいました。

その絵姿えすがたは、妹の春姫ひめでした。

春姫ひめのいいなずけの太郎が、絵姿えすがたにみとれながら、山の頂きいただで笛ふえのけいこをしていたときに、急きゆうに吹ふいてきたつよい風に、たいせつな絵姿えすがたをとばされてしまったのでした。

長者ちやうじやは、春姫ひめをつれてきました。

王おおきみは、浅香姫あさかひめと春姫ひめをりようわきにすわらせて、夜がふけるまで酒さけのみました。

つぎの日、長者ちやうじやはおそるおそる

「葛城王かつらぎのおおきみさま、どうか、年貢米ねんぐまいをお許ゆるしく下さい」と、またお願いねがしました。

すると王おおきみは

「よし、その願ねがいをききとどけてやろう。そのかわり、春姫ひめを、帝みかどにおつかえするうねめにせよ。わたしが、奈良ならの都みやこにつれてまいる」と、いきました。

長者ちやうじやはおどろきで、ことばができません。

春姫が、太郎と婚礼をあげる日を、どんなに心待ちにしているか、長者にはよくわかつています。けれども、春姫を奈良の都へやらなければ、年貢米を許してもらえないのです。

長者は、涙をこらえて

「春姫をうねめにさせます。奈良の都へおつれください」と、いいました。

これをきいた春姫の心は、悲しみではりさけんばかりでした。けれども、村人たちを思う父親の苦しい気持ちに胸が痛み、奈良の都へ行く決心をしました。

しかし、太郎は、春姫への想いをたちきれません。葛城王を殺そうとくわだてたのですが、長者に知られてしまいました。

太郎は、とらえられて、山奥の牢に入れられました。



月日は流ながれて、かつこうの鳴なく五月になり、葛城王かつらぎのおおきみの一行いっこうは、春姫ひめをつれて、奈良ならの都みやこへ、もどることになりました。

長老ちやうじやと、おおぜいの村人むらびとたちは、村のなんぎをすくつてくれた春姫ひめを、郷さとのはずれの橋はしのたもとまで見送みおくりました。

春姫ひめは、橋はしのとちゆうで立ち止まり、母親ははにかけよつて、耳みみもとに「かならずもどつてまいりますと、太郎たろうさまにお伝つたえください」と、ささやきました。

春姫ひめが、奈良ならの都みやこへたつてからしばらくして、太郎たろうは許ゆるされて、牢ろうから出だされましたが、すっかりやせおとろえていました。



太郎は、安積の郷へはもどらず、山の井の清水にむかいました。その清水は、一心に祈ると、会いたい人の姿が浮かぶと、いい伝えられていました。

清水にたどりついた太郎は、水辺にたたずんで

「春姫、春姫」と、呼びつづけました。

すると、清水に春姫の姿が、浮かびあがってきたのです。

それはそれは美しい笑顔でした。

太郎は、むちゆうで清水へ入っていき、水の中に消えてしまいました。

それは、木々の緑がまばゆい、静かな昼さがりのことでした。

さて、奈良の都へのぼった春姫は、うねめになる礼儀作法をおそわって  
いました。

夏もすぎ秋になり、十五夜の月見の宴で、春姫は、帝におめみえすることになりました。

月が、猿沢の池を照らしています。美しいうねめの衣をまとった春姫は、帝のそばちかくにすわりました。にぎやかな宴のさいちゆうに、春姫は、急におなかか痛くなつたふりをして、池のそばの小屋にさがりました。

やがて、宴がおわり、あたりが静かになりました。春姫は、そつと小屋を出て、池のほとりの柳の木にうねめの衣をかけ、そのそばに履き物をそろえました。池に身をなげて、この世を去つたようにみせかけたのです。

そして春姫は、奈良の都からぬけ出しました。

太郎を想い、照る日も降る日も、安積の郷へむかって歩き、夜には、人里はなれた小屋に泊まりました。



季節はかわり、冷たい北風が吹きはじめましたが、春姫は、一日も休ま  
ず歩きつづけました。太郎に早く会いたいと、心がせかされたのです。

やがて、うっすらと雪化粧をした、ふるさとの山々が見えてきました。

春姫がようやく安積の郷にたどりついたのは、十一月の終わりのことでした。

けれども、なんとということでしょう。太郎は、もうこの世にはいないと、  
知らされたのです。

春姫は、もういちど、太郎に会いたいと思いつめて、山の井の清水に  
むかいました。

清水のほとりにしゃがみこんで、池にむかって太郎の名を呼びつづける  
と、太郎のあのやさしい笑顔が浮かびあがってきたのです。春姫は、すい

よせられるように、清水しみずの中に入はいっていきました。

まもなく、清水しみずのまわりは、雪ゆきにすっぽりとうもれ、訪おとずれる人もなくなり、山の井いの清水しみずは、深ふかい眠ねむりにつきました。

雪ゆきがとけて、草木くさきが新あたらしい芽めをだしはじめ、春はるになると、山の井いの清水しみずのほとりに、今までに見たことのない薄うす紫むらさき色の小こさい花はなが、いっぱい咲さきました。村人むらびとたちは、春姫はるひめと太郎たろうの生まれ変かわりだとうわさし、みんなでいつくしみ、そっと見守みまもりました。

それから後のち、毎年まいとし春はるに薄うす紫むらさき色いろのかれんな花はなが咲さくようになり、だれいとうなくこの花はなを「花はなかつみ」と呼よぶようになりました。

この花はなかつみは、今いまでは郡山こおりやまの「市いちの花はな」になっています。



あとがき

私が「あさかうねめ」に惹きつけられたきっかけは、「うねめ祭り」の真っ只中にたまたま東京からお客さまがおいでになり、奈良から遠く離れたこの地の祭りに深く興味を示されたことからでした。あやふやな知識しかなかった私は、満足な説明ができませんでした。そこで、五〇六編の「郡山の采女伝説」を読んだのです。

そして初めて、千数百年も昔のことをいつの頃からか安積の人々が、子から孫へと大切に語り継いできたものだとなりました。郡山の采女伝説は、口伝えの常として、それぞれに違いはありましたが、采女にされるために奈良の都につれて行かれた春姫が、安積の郷に戻ってきたという大筋

は共通していました。

私は、物語のあらすじよりも主人公の「春姫」に魅了されて、その人柄はもちろんのこと、暮らしぶりなどもあれこれ思い描いて、時を忘れて楽しんでみました。

それから数年経った一九九四年に、今泉正顕著『安積采女とその時代』（教育書籍出版）を手にししました。読み終えたときには子どもたちに「うねめものがたり」を語りたい気持ちで一杯になっていました。そして、子ども向きの物語に書き直して、翌年の七月に桃見台小学校の三年生に初めて語りました。無心に聴き入ってくれる子どもたちの姿に励まされて、それから毎年七月になると、図書館・小学校などで子どもたちだけでなく、大人にも語っています。



この『あさかうねめものがたり』は、今泉氏が述べられているように、おおもとの「郡山の采女伝説」に、「虎丸長者伝説」と「絵姿女房」の民話が加わったものです。

伝説は、忘れないで欲しい願いをこめて幾世代にもわたって語り継がれてきたお話です。この物語をお読みくださった皆さまが、今のわたしたちに命をつないでくれた遠い祖先に想いをはせていただけたら嬉しく思います。

物語に奥行きを与えてくださった橋本貢氏と、このように皆さまにお渡しすることを快くお許しくださいました今泉正顕氏に、深く感謝申し上げます。

一九九九年 六月

左近司  
マサ江